

# 幻魔大戦 15

幻魔の標的

平井和正



角川文庫 5087

げん ま たいせん  
幻魔大戦

15

ひら い かす まき  
平井和正



角川文庫 5087

昭和五十七年一月三十日 初版発行  
昭和五十八年四月一日 八版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十二三

電話東京二六五―七一一(大代表)

二一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——文宝堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバーに明記してあります

Printed in Japan 0193-138329-0946(0)

# 幻魔大戦 15

幻魔の標的

平井和正



角川文庫 5087



GENKEN箱根セミナーの二日目は、初日とは異なる昂ぶりの中に明けた。

起床時からすでに騒然とした落着かぬものが漂っていた。前夜の幽霊談やルポライター風間の悪魔憑依騒ぎが尾を曳いて上<sup>ひ</sup>に、睡眠不足で神経が立っているからであろう。

参加者の期待は午前中に繰り上げられた井沢郁江の講演に集中していた。もちろんハイライトは東丈の講演に止めをさすが、郁江が丈によって幻魔担当に任命されていることは、いつの間にか衆知の事実になっていたし、妖精のような郁江が何を喋るのかと強い興味を湧きたたせていても不思議はなかった。

それにしても、セミナー二日目の雰囲気はがらりと一変していた。苛立たしい不快な緊張感を隠しようがなかった。

朝起きぬけの体操時に、初日の爽やかな華やきが消え失せてしまっていた。セミナー参加者全員が何も知らされぬうちに、上層部を襲った動揺を知り尽してしまっているようであった。

会員たちには奇妙な敏感さがあった。それはまさに超能力としかいいようがない。いかに隠し立てしても、真実はいつの間にか漏れて、知れ渡ってしまっているのだった。いつもそうなのである。

その現象は、会員の間にも心霊的能力の持主が増加していることと無関係ではないのかもしれない。会の最高機密であることが、ごく速やかに秘書室の外部へ漏洩（ろうえい）してしまうのだ。杉村由紀（すぎむらゆき）がどのように神経質になっても決して情報漏れをカットできない。肝心な秘密はいつしかこっそりと人々に耳打ちされていることになるのだった。

東丈が日本を離れることになったという噂（うわさ）は、前夜のうちに流れてしまっていた。幻魔の攻勢が急なため、今まで通りの地味な活動ぶりでは追いつかなくなり、東丈は米国の巨大組織の招聘を受け、渡米することになったのだ……全米一の大富豪が東丈のバックについたらしい……

しかし、東丈が離れた後の日本は、大きな危難（きざん）に曝（さら）されることになる。東丈の巨大な庇護（ひご）を失った日本は天変地異や大災害に襲われることになるだろう。GENKENは井沢郁江の手に後事を托（たく）されることになり、彼女の講演でそのことが明らかにされ、改めて会員一同の自覚と決意が求められるはずである。

東丈は渡米のための準備で夜のうちに帰京し、セミナーは丈抜きで行なわれることになるらしい……

その証拠に、東丈や杉村由紀らは朝から人前に姿を見せておらず、会の幹部たちはひどく動揺した気配を示している……

もっともらしい噂（うわさ）が人々の間に浸透（しんとう）していた。表立って質問がなされないため、噂（うわさ）は陰湿（いんじつ）さを帯びてきていた。どのようなゆたかな想像力の持主が才のおもむくままにでっちあげたのかと感

心するほどであった。

とりわけいかにももっともらしいのは、高鳥慶輔たかとけいすけが東丈を出し抜き、米国の大富豪に取り入ることに成功したため、丈は急遽きゆうきよ、アメリカへ飛ぶことになったという情報であった。丈が巻き返しを余儀なくされたため、昨夜来浮き足立っているのだという説である。

人々は東丈の渡米で心が揺ぎ、留守中の不安で満たされて、陰湿な風聞をせっせと取り込んでしまっていた。なによりも幻魔の攻勢が増大しているという直感が不安を掻き立て、沈んだ苛立たしい気分を満たされたまま、セミナー二日目を迎えたのである。

田崎宏たざきひろしは、東丈の不在がたちまち不安となって人々の間にはね返るのを肌で感じていた。ただの噂だけで他愛なく心がぐらついてしまうのだ。それほど丈への依頼心は強度であり、自覚にはほど遠いといわねばならない。

むろん、それは決して他人事ではない。田崎自身にも、丈の不在は不安をかきたてるものがある。力強い庇護の光が頭上から去り、裸になった心細い感覚だ。

東丈は昨夜からホテルに戻っていないようである。秘書たちはそれを隠そうとしているが、一種の皮膚感覚でだれにもわかってしまう。光が離れた空虚な感じであり、それはもはやだれもが霊覚を備えて察知しているとしかしいようがなかった。

「どうなってるんですか、師匠？」

と、河合康夫かわいやすおがこっそりと田崎に尋ねた。

「朝からざわついちゃって、どうしようもないすよ。注意力散漫になっちゃって、どこの部屋も自己研修なんてムードじゃないみたいです。朝飯を食堂でくってる時に、へんにしんとしたたでしょ？ 変にひそひそしてて、厭なムードですなあ」

ホテルの廊下での立ち話だった。

「本当に先生、昨夜からお出かけのまんまですか？ 朝帰りもしておられない？」

「口が軽いぞ。先生がおられないとなれば、余計に俺たちはしっかりしてないといけななんだ。わかってるだろう？」

「そりゃわかってます。しかし、ひよっとしたらこのセミナー荒れるぞって予感してたら、その通りになっちゃった。先生がいないとすうっと陽の光がかげったみたいに冷たく荒涼となっちまうんだから」

康夫は顔をしかめていった。

「今はもう『郁姫様』だけが頼りってもんで……先生は昨夜のうちにアメリカへ飛んだっていの、本当ですかね？」

「お前までそんな噂を持ち歩いたらいかんじゃないか。セミナーは予定通りちゃんと進行してる。先生がどこで何をしていらっしやろうと、そんなことはいい。余計な揣摩臆測をしててどうする。だれかに質問されても、いい加減な推測は喋るなよ」

田崎は黒々とした眉をしかめていった。

「その点は大丈夫です。こっちが塾生とわかってるし、会員の方々は遠慮なさってあまりお声をかけて下さらないですからね」

「くだらん勘<sup>す</sup>ね方はするな。まだ氣心が知れてないし、遠慮があるのは当然だ」

「向うは塾をおっかない右翼だと思ってますよ。強<sup>こわ</sup>もてしそうなのが肩そびやかして歩きまわってるから……」

大広間の研修会場へ向うセミナー参加者たちが、立ち話している二人に会釈して通りすぎる。好奇心はあっても、どこことなく恐いという感じで、尻<sup>しりぞ</sup>込みの氣配が見える。互いに遠慮や隔意があつて、さりげなさを装っているものの、態度が固い。

GENKEN会員たちには、膚<sup>はだ</sup>合<sup>あ</sup>いの異なる塾生たちの逞<sup>たくま</sup>しさや力強さが畏怖の念とともに差別感を生じさせるようである。右翼や体育部学生の非知性に対する輕蔑<sup>けいべつ</sup>に通じるものが仄<sup>ほの</sup>見える。

「しかし、郁江に本当に先生の代理が務まんですかねえ」と、康夫が疑念を表明した。

「だいたい郁江はこれまで人前で喋ったことなんかないんでしょ？」

「心配するな。郁江はお前みたいに神経がかぼそく出来ていないよ。それに先生だって最初の講演をされるまでは、人前でぴしりとお話になったことは一度もないとおっしゃってた」

「だってさ師匠、先生と郁江は違いますよ」

「いや、郁江は大物だよ。最近はこう、凄味<sup>すこみ</sup>さえ出てきた……お前は綺麗<sup>きれい</sup>な顔に惑わされてる

んだ。郁江はお前が思ってるように、ちよつとおしやまな可愛い子ちゃんじゃないぞ。底の知れない骨太なところがある」

「そりゃ俺だって、ただの可愛い子ちゃんだとは思ってませんよ」

康夫があわてて弁解する。

「おいそれと先生の代役が務まるかどうか疑問を感じてるだけですよ。だってそうじゃないですか。先生のあの白熱した凄い講演の代りはだれにも務まらないでしょ？」

「そりゃ先生を真似ても無駄だ。各自の持味でやるしかない。こんなことで疑念を表明するより郁江を励ましてやれ。たかが百人足らずでも講演てのは大変だぞ。お前が自分でやると考えてみる。みんながじいつと穴のあくほどお前の面を見てるんだぞ。喋れるか？」

「まあ、落語ぐらいならなんとか一席……」

「やっぱり郁江はだれよりも自覚して先生に近いからだよ」

と、田崎は重々しくいった。

「修羅場を踏むと、あんな可愛い子でも空恐しいほど、真の靈性が顕あらわれてくる。その点は明あき雄も同じだ。ただ超能力がついたというだけじゃない。そんな超能力なんか屁への突っ張りにもならん。生病老死を超えろというのは、人間にとって第一関門の突破だ。全てはそこから始まるんだ。

俺たちなど偉そうなことをいってるが、郁江や明雄の足許にも及ばんかもしれんぞ」

「そらまたご謙遜を。あたしなどはまさに屁の突っ張りですが、師匠も修羅場を踏んだ数では鬼神も避けるという……」

康夫は、田崎の首筋の生々しい傷痕にちらと目を向けた。山本はその傷痕の由来を話したがないが、明雄の口を通じておおよそのことはわかっている。田崎がいつでも命を張って生きているという証明なのである。

田崎宏は自分のこととなると含羞がんしゅうの人であった。光る大目玉が照れでいっぱいになってしまふ。「俺などはまだ生病老死を超えていないよ。執とらわれが多すぎて、どうにもならん……」

「師匠がそんな気弱なことをいってたら、どうなるんですか？ 師匠が先生のためならいつでも死ぬるってことは、だれでも知ってますよ。師匠は昔から恐いもの知らずで有名だったじゃないですか」

「頭が嚇おそっとなつてしまえば、恐怖心はなくなるが、所詮はその時限りのものだ。平常心からしてそうならなければだめなんだ……ところが、俺なんかは普段は恐いものばっかしだ。不動心なんかとてもじゃないが、及びもつかない。物事に執着が多すぎる証拠だ。つまらないことで、すぐに心が騒いで揺らぎだす。そうならもう自制心なんかどこかへ消えちまう。すぐ頭に嚇おそつと血がのぼる癖が一番恐いといえば恐い。先生にどんな迷惑をおかけするかわからん……」

「師匠がそんな心細いことをいってたら、我々はどうなるんですか？ 先生は、師匠を全面的に信賴してますよ。そんな気の弱いことはいいっこなしですよ」

「しかし、前世のことがある……」

「それはいいっこなしだ。前世は前世、今生は今生と先生もおっしゃってるじゃないですか？ それこそ執とらわれというもんですよ。もっとどっしりと自信をもって下さい。師匠が抑えをきかせていなかったら、先生だって存分に務めを果せなくなっちゃいますよ……」

「まだ未熟すぎるんだ……」

田崎は実感をこめて、嘆息するようにいった。

「己おのが心がどうにもならん。軟弱ですぐにグラグラ揺れる心がな……」

「そんな絶対の不動心を持った人間がいたら氣持悪いですよ」

と、康夫が抗議した。

「人間味がないですよ。それこそ神様か仏様だ。師匠は恐ろしく短気で、それをぐっと堪こらえて真赤になつてるところが人情があつていい。先生だっていつも悟り澄ました聖人君子になる必要はないっておっしゃっているじゃないですか。師匠がぐつと堪こらえて口をへの字にして真赤になつてるのを見ると、熱い湯に入つて我慢してるみたいだって市枝いちえもいってます。これもまた、なかなかチャージングっていうんじゃないですか？」

「茶化すな」

田崎が苦笑する。

「師匠もどうして、隅に置けないですからね」

と、康夫は意味ありげにいった。

「しかし、まあ、女難ってこともあるんですから、くれぐれも気をつけて下さい」

「なんの話だ？」

そこへ、研修会場へ向う笛川ふえかわと松代直子まつしろなおこの二人がやってきた。二人とも医師と看護婦には見えない。トレーニング・ウェアを着た直子はやはり若い女教師のように見える。眉の迫った意志的な顔立ちが際立っている。その印象に引きずられてか、笛川も非凡な外科医のイメージはまるでない。

二人は引き寄せられるように、田崎たちに近づいてきた。

「お早うございます。いかがですか？」

と田崎が尋ねる。東丈の計らいで特別参加を認められた彼らは、ともすれば塾寄りの姿勢になる。会員とは馴染みにくいところが多少あるようであった。やはり開放的な塾と閉鎖的な会の氣質の相違があるのであろう。

「昨夜は一睡もできなかったですよ」

と、笛川医師が寝不足の充血した目で答えた。田崎たちの顔を見て、安堵あんどした感じは否めなかった。

「わたしも……眠ろうとすると目の前にいろいろな顔が現われて」

と、松代直子がいった。こちらは睡眠不足という顔ではなかった。若さの精気が底光りするよ

うに滲み出ている。どんな不都合があろうとも、享受すべき楽しみを見出している証拠であった。

「昨夜はいろんな騒ぎがありましたからね」

と、田崎はいった。最大の騒動の張本人、ルポライター風間は、今朝はまだ姿を現わしていない。狂態を演じた手前、面目なくて人前に出られないのか。あのトップ屋に限ってそんな氣遣いはない、と田崎は思った。感性にかけては不死身性の持主なのだ。

「彼女は、夜っぴて金髪美女の顔が見えてうなされ通しだったようです」と、笛川がいった。

「金髪美女ですか？」

田崎は太い眉をぴくりと動かした。

「ええ、それだけじゃなくて、とてもこわいものばかり見えてしまつて……」

松代直子は唇を小さくすぼめ、いおうかいうまいかと迷っていた。

「こんなことをいうと、頭がおかしいんじゃないかと思われそうなんですけど、何かとても恐ろしいことが起きるような気がするんです。まだ現実には起きていないらしいけれども、物凄い未来の光景をくり返しくり返し見せられたような感じなんです……」

「恐ろしい顔が沢山見えたのですか？」

と、田崎が興ありげに尋ねた。

「ええ。めっちゃめっちゃに崩れた恐ろしい人間たちの顔です。焼けただれたり、骨が見えるまで

傷ついた顔……真黒に炭化して目鼻立ちもわからない顔とか、むごたらしい、とても人間とは思えない顔ばかりです。その沢山の顔が、わたしに何か訴えようとしているらしいんです。わたし、そう感じてました。一晩中……」

「その金髪美女というのは？」

「それは傷ついてはいません。何もいわずにただわたしをじっと凝視しているだけです。でも、ひどく辛く苦しそうで、病気じゃないかという気がしました。苦しい、悩ましい気持ちが伝わってくるんです……」

「松代さんに何か伝えようとして？」

「いいえ。わたしにはただそう感じられるんです。どこにいても、あおい眸ひとみが目の前に浮んできます。目を閉じても見えてしまうんです。一晩中つきまとわれました。いったいどういふことなのでしょう？ どうも普通の地縛霊とは違うみたいなんです。それは相手の感じでわかりません」

「つまり、意志伝達はなくて、ただその金髪美女に見られていただけなんですネ？」

「ええ。でも一晩中ですから、疲れました」

しかし、口とは裏腹に松代直子の顔は若さが張り詰めていて、少しも疲れた様子ではなかった。「まあ、松代君は霊視の能力があるんで、そういうことがあっても不思議はないですが」

と、笛川医師が口をはさんだ。参加者がすっかり会場へ行ってしまう、後にとり残された恰好かつこう

になっていた。もう視線や耳を気にすることはなかった。

「僕まで見てしましましてね……松代君といっしょです。あの悪魔が憑いたという大騒ぎの少し前、十分ぐらい前です。ホテルの廊下を、こっちは丁度逆方向の棟になりますが、真夜中の廊下を黒人の幼児が一人で歩いているんです。松代君と二人ではつきり見ました。なぜ私までそんなものを見てしまったのか納得が行かんですがね。私にはいわゆる心靈的能力はありませんから」

黒人幼児、と聞いて、田崎宏は鋭く康夫の顔を見た。康夫は一向に感応するものがないようであつた。

「へえ？ 子供が夜中に寝呆ねぼけていたんですかね」

と、康夫が若干無責任な調子でいった。

「そう思つたんですが、私と松代君の前で、いきなり消えてしまいましたから。こうスイッチを切つたように、唐突に消失しました。私には、いわゆる幽霊とは思えなかつたんですがね」

「黒んぼの子供がね、わからないな」

「確かに突拍子もないことは認めますがね」

笛川医師は弁解するようにいった。

「まあ、精神神経の異常興奮による幻視かもしれません。昨夜はいろんな幽霊話があつたようですから、暗示による幻覚だったとしても不思議はないんですがね」

「あれは絶対に幻覚なんかじゃありません。ここにおいで。田崎さんや河合さんと同じくらい現実的にはつきり見えなんですから。金髪美女の場合とは違います」

と、松代直子が頑張る。康夫の懐疑のない草が気にさわったようであった。

「ま、昨夜から突拍子もないことばかり起きてますからね、光球が頭上を群れなして飛んだり……」

田崎はなだめるようにいった。

「まあ、金髪美女も、黒人幼児も一概に幻覚ではないかもしれませんが。しかし、それはいずれはつきりするんじゃないですか」

「そう。私も松代君にそういつていたんですよ。何か大きな事の起きる前兆かもしれない……このセミナーに参加した人々は、心霊的に敏感な人が多いらしい。東丈先生が渡米されることを感づいて、動揺しているんじゃないですか？」

「先生が渡米されるといったことを、どなたにお聞きになりましたか？」

「いや、もっぱらの噂です。メイン財団のメイン会長が先生を強く招聘していることは、だれでも知っていますよ」

田崎と康夫は互いに顔を見合わせた。

「先生が日本を離れたら、その間に何が起きるかわからないという不安が皆さんの間にあるようです。みんな、かなり心細くなっているんじゃないですか？」